

六郷を探る会

今泉・日辺編



仙台市六郷市民センター

平成 18年 10月

名取川の左岸に広がる田園地帯 今泉

- 2 弥生時代から江戸時代までの複合遺跡「今泉遺跡」^{いまいづみいせき}
- 2 大友家の武具を埋めた「梅塚」^{うめづか}
- 3 暮らしを守ってきた森「大友さんの居久根」^{いぐね}
- 4 村の中心だった寺「祐善寺」^{ゆうぜんじ}
 「祐善寺」「二十九番札所・祐善寺観音堂」「斎藤俊平の碑」^{さいとうしゅんぺい}
- 5 今泉城跡に建つ「八坂神社」^{やさか}
 「八坂神社」「二十八番札所・円浄寺観音堂」「熊野神社の鰐口」^{わにぐち}
- 6 伊達家家臣が居住していた「今泉城」
- 7 寺は消え観音堂が残った「高福院観音堂」^{こうふくいん}

広瀬川と名取川の合流点 日辺

- 8 縄文時代以来の集落跡「高田B遺跡」
- 9 畑の中からあらわれた如来像「定義如来」^{じょうぎにょらい}
- 9 門松伝説のある八幡さま「日の宮八幡」^{ひのみや}
 「日の宮八幡」「日辺のお門松」
- 11 眼病を治す「三日月不動尊」^{みかづき}
- 11 餓死者のための供養塔が建つ「徳照寺」^{とくしょうじ}
 「徳照寺」「針生林蔵」「飢饉供養塔」^{はりうりんぞう}
- 12 観音像のゆくえ知れず「子育て観音堂」
- 13 1本の木から三観音がつくられた「両全院観音堂」^{りょうぜんいん}
- 14 村を不作と疫病から守ってきた「神明社」^{しんめいしゃ}
- 14 奥州征伐までさかのぼる歴史「高田八幡神社」

古老が伝える地域の物語

- 16 今泉の物語
 「夜泣石」^{よなきいし}「桜の木」^{やなぎくら}「焼桜」^{いちりづか}「一里塚の碑」^{ほっけきょうづか}「法華経塚」
 「雑魚作」^{ざつこさく}「高札」^{こうさつ}「飛地古川」^{とびちふかわ}「千本杭」^{せんぼんぐい}「中村堤防決壊」^{なかむらていぼう}
- 18 日辺の物語
 「渡し舟」^{いさば}「五十集のおばさんと茶店」^{だちんば}「駄賃場」
 「スーズカン畑」^{ぼたけ}「タコドリ」^{あゆこや}「鮎小屋」^{たかつぼら}「高原運動場」

(付録) 六郷の地図 (昭和22年と現在)

六郷を探る会

今泉・日辺編

表紙 投網 (日辺)

六郷カメラ愛好

名取川の左岸に広がる田園地帯 今泉

いまいづみむら
『今泉村』 現仙台市若林区今泉

二木村の西、名取川が広瀬川と合流する地点の左岸、自然堤防上に立地し、全体に平坦地。南東は種次村、西は日辺村と接する。建武三（1336）年二月七日、国分盛胤（※1）が北畠顕家（※2）の軍に従って転戦した功により国分庄名取郡のうち今泉・飯田・日辺三村が与えられている（平姓国分系図「宮城県史」所収）。村のほぼ中央の久保田にある玄蕃館ともよばれる今泉城は、「仙台領古城書上」には平城で東西三十六間・南北四十五間とあり、城主は国分氏家臣とされる須田玄蕃と伝える。近年の発掘では弥生期から中世にかけての複合遺跡（※3）が発見され、南北朝期の大甕・青磁片などが出土している。天文七（1538）年の段銭古帳の名取のうちに、「十四貫百五十文 いまいつみ」とあり、戦国期は伊達氏領であった。

「正保郷帳」に田九十七貫五百六十九文・畑十貫七百八十五文、ほか新田六貫九百六十七文とある。幕末と思われる村毎貫高付（斎藤報恩会蔵）では百三十四貫七百三十八文。「封内風土記」に戸数四十九とある。文政四（1821）年頃の今泉村絵図（仙台市博物館蔵）によると、集落は久保田¹を中心に南屋敷・こさいけ屋敷・中村屋敷・新屋敷など十三ほどある。いずれも北側と西側に居久根（屋敷林）がみえる。久保田の東側に中江があり、中央に観世音、北側に祐善寺・円乗寺（現存しない）、東側に権現があり、寺社を中心に村が広がっている様子がうかがえる。「名取郡地誌」によると明治十（1877）年頃の戸数七十六、男二百七十五・女二百三十六、馬四十三で、物産に鶏卵四千顆などがある。「日本教育史資料」によると、天保二（1831）年から明治元（1868）年まで漢学と筆道を教授する好静堂という私塾が開設されていた。弘化三（1846）年には斎藤亮輔のもと男子九十人の生徒がいた。

久保田には熊野神社・牛頭天王社（八坂神社）がある。浄土真宗本願寺派の今泉山祐善寺は寛文六（1666）年順西の開基とされる（封内風土記）が、祐善寺記録（同寺蔵）によると、伊達政宗の臣立花一吉が天正年中（1573～92年）米沢口の戦で負傷したのち剃髪して祐西となり、大阪冬の陣で負傷した子息の主水とともに当村に土地を拝領して堂宇を建てたのが開基という。本尊は阿弥陀如来。中村には曹洞宗の慈眼山地福寺があり、本尊は正観音菩薩。
(平凡社「宮城県の地名」)

（※1）国分盛胤

国分氏の初期の館跡は明らかでないが「仙台領古城書上」には国分盛氏は、小泉邑（若林区南小泉）の古城を居城とし、松森城には国分盛重が移ったと伝えられている。

天正5年（1577年）に国分盛氏が死去すると国分氏の跡目問題に伊達政宗が介入したことから争いが起こり、国分氏は滅亡した。この時の国分家中が今泉城主・須田玄蕃である。須田玄蕃は豊臣秀吉による「奥州仕置」（1590年）の折、伊達政宗に反感を持ち敵対した。

(※2) 北畠顕家

元弘3年(1333年)幕府が倒れ、後醍醐天皇による建武の新政が始まり、北畠顕家が陸奥守に任命される。しかし新政は、南朝(天皇)と北朝(幕府)の内乱によって崩壊する。貞和元年(1345年)、幕府を開いた足利尊氏は、奥州管領(将軍の補佐役)として畠山国氏と吉良貞家の兩名を任命する。観応元年(1350年)北朝同士の間(観応の擾乱)は、奥州にも波及して、両管領は対立(岩切城の合戦)する。

吉良貞家は三本塚郷(現二本・三本塚と現六郷全体の二説ある)を名取熊野堂に寄進する。三本塚の「畠山稲荷神社」はもう一方の管領、畠山氏を祀ったものと思われる。

(※3) 複合遺跡

弥生時代から近世(江戸時代)にかけての広範囲の時代の遺跡で、今泉遺跡を指す。

弥生時代から江戸時代までの複合遺跡「今泉遺跡」

『今泉遺跡』

今泉遺跡は文献などにより、中世の館跡(今泉城—須田玄蕃館)として古くから知られていたが、南部道路建設時の昭和54年から平成元年までの4次にわたる発掘調査で、この複合遺跡から、建物跡、井戸跡、土杭跡、橋脚等が検出された。遺物は渥美、常滑、古瀬戸、在地産陶器、鉄鍋、鏡、古銭、鋏、刀、鎌が出土している。その一部は仙台市博物館に陳列されている。

大友家の武具を埋めた「梅塚」

地図①

『梅塚』

この付近に古墳時代(4世紀~7世紀)の梅塚古墳があったとされる。

また、この地はかつて豪族の大友氏が、帰農の際、武具や貴重品を埋めたので、埋塚といわれていたものを、梅の木を植えたことで、梅塚と呼ばれるようになったと伝えられる。



梅塚は、子ども達が遊ぶ
梅塚公園の中にある

『大友さんの居久根』

大友家は、江戸時代には今泉の肝煎きもいりを務めたという旧家で、現在のご当主の大友一さんで22代～23代になるという。代々、榊太郎兵衛(ハヌキタロベイ)を名乗り、梅塚に武具を埋めたという伝説が残されていることから、昔は武士だったと思われる。歴史は仙台開府より以前にさかのぼるようだ。

旧家のたたずまいをかもし出しているのが、家のまわりを分厚く覆う居久根である。居久根は、六郷のような平坦地で農業を続ける際に、いわば森の機能を果たす、なくてはならないものであった。それは、防風、防雪、防火のみならず、家の建て替えには用材を生み、果実などの恵みをもたらし、落ち葉は畑のための堆肥となるなど、生活をすみずみまで支えるものだった。



居久根と母屋



歴史のあるクロマツ

大友家の居久根には、伊達政宗が鷹刈りの際、鷹をとまらせたと伝えられるクロマツがある。そのほか、梅、カキ、桜、スギ、ハンノキ、カシ、モミジ、サンショウ、お茶など、多彩な樹木が育っている。いずれも食用や、用材として用いてきたものだ。昭和42年に現在の住まいを建てる際にも、2年前から100本以上の樹木を伐採して乾燥させ、用いたという。

また、屋敷内には、明神様のほか、観音様が祀られている。観音様のお堂の鱧口わにぐちには、「文化十年」と刻まれている。

居久根は、このあたりの農家ではどこでも備えたものだったが、都市化の波の中で近所からの苦情が相次ぐなどして伐採することが多くなり、いまはわずか数軒となっている。



鱧口は文化10年(1813年)のものだ

村の中心だった寺「祐善寺」

地図③

『祐善寺』

祐善寺記録によると、伊達政宗に仕えていた立花一吉が米沢口の戦の後、剃髪して祐西となり、元和3年（1617年）今泉村に土地を拝領して堂宇を建てたのが開基という。その後、寛文6年（1666年）順西が改派している。

藩政時代には二度の大火にあい、本堂を始め諸宇残らず焼亡したが、現存する過去帳には天明・天保の飢饉の記録が残されている。

山門を入ると左手に二十九番札所祐善寺観音堂がある。



今泉山とよばれる祐善寺

『二十九番札所・祐善寺観音堂』

仙台三十三観音（※4）のうちの二十九番札所が祐善寺観音堂である。ここに安置されている十一面観音菩薩の尊像は鎌倉時代の作と伝えられ、今泉城跡（後述）にあったものを昭和7年に現在の地に移したものである。

（※4）仙台三十三観音

庶民信仰の観音堂参詣は政治が安定し、庶民文化が栄えた元禄頃に始まった。仙台三十三観音信仰の始まりは伊達家4代目綱村の時代である。仙台三十三観音は、大きな寺のみでなく、小さな観音堂でも由緒の正しいもの選ばれていた。観音講、お不動講など「講」を作って巡礼する人が多かった頃は、2、3日がかかりで一番から順番に巡礼し、笠、杖などの装束に鈴を鳴らし御詠歌を唱えたものだが、今やかつての姿はなく、車やバスなどでの足早な巡礼姿がわずかに見られるのみである。三十三のうち六郷には五観音がある。六郷に五箇所集まっているのは、この土地の人々の信仰の篤さを物語っているように思われる。



厳かな雰囲気のただよう祐善寺観音堂

六郷にある五つの観音堂とご詠歌

二十六番札所・両全院観音堂（日辺）

見てもしれつもりし罪はあさひかげ たらすひかげの雪のきゆるを

二十七番札所・満蔵寺観音堂（上飯田）

ゆたかにて人も飯田やかずかずの ほとけの宝蔵に満つれば

二十八番札所・円浄寺観音堂（今泉）

すみわたる心の月のまどかにて 浄きひかりはわれにこそあれ

二十九番札所・祐善寺観音堂（今泉）

もうで来る人につけても館の名の ありしむかしぞ思ひやらるる

三十番札所・高福院観音堂（今泉）

いにしへもさぞなありけん今泉 わきてながるる末が末まで



三十三箇所全てに石標がある
(写真は二十八番円浄寺観音堂の石標)

三十三観音を祀る寺院あるいは堂宇の門前に、仙台〇〇番観世音と記した石標が立っている。これは昭和11年12月に仙台市一番町の茶舗よろづ園主人の一方友助氏が私財を投じて建立したものである。筆は輪王寺の福定無外和尚で、北山に住む石工の庄子栄之助が刻立したことが裏面に記されている。

さいとうしゅんぺい 『齋藤俊平の碑』

今泉村に居住した儒医で、文化4年（1807年）～明治15年（1882年）の医師で医術のかたわら今泉村、日辺村の師弟を教育した。門人の数は千人余りに達し、その功績は非常に大きい。



この碑は明治17年に
門人たちによって建てられた

今泉城跡に建つ「八坂神社」

地図④

やさかじんじゃ 『八坂神社』

明治の終り頃まで、今泉城跡の東側には熊野神社、北側には宝泉寺があったが、現在は八坂神社と円浄寺観音堂が並んで建っている。

八坂神社は牛頭天王（通称テンノン様）またはスサノオの命を祭神とするが、詳細は不詳。安永元年（1772年）の封内風土記（今泉邑）でも、「熊野神社と牛頭天王（八坂）社が何時勧請か不詳」と記されている。



左は八坂神社、右が円浄寺観音堂

『二十八番札所・円浄寺観音堂』 えんじょうじかんのんどう

円浄寺は元龜2年（1571年）に三知法印の開山と伝えられているが、明治になって廃寺になり、寺小路の円光寺に統合されて観音堂だけが残された。ここには聖観音が安置されており、地域の人々によって手厚く守られてきた。

（円浄寺は円乗寺とも記しており、同一のものである。）

『熊野神社の鰐口』 くまのじんじゃ わにぐち

熊野神社は二木の日吉神社に合祀されて、今は小さな祠が残っているのみである。円浄寺観音堂には元の熊野神社にあったという鰐口が残っていて、それには次のように記されている。



天明5年（1785年）の鰐口

奉納 熊野山大権現 天明五^〇年九月十九日
名取郡北方今泉村

肝入願主 柴崎又十郎

願主同村 長右衛門同惣村中

洛工 北目町住大出和四郎洛具

天明五年 鰐口 仙台市今泉円浄寺
径一尺二寸

（「宮城県の金石文」参照）

伊達家家臣が居住していた「今泉城」 いまいづみじょう

『今泉城』 いまいづみじょう

今泉遺跡の一角にあったとされる初期の今泉城（別称館屋敷・玄蕃屋敷）は、17世紀に書かれた文献によると「東西三十六間（約64.8m）・南北四十五間（約81m）の大型の平城で、城主は須田玄蕃と記されている。須田玄蕃は安土・桃山時代（1575～1600）の伊達政宗家臣で、詳細は明らかではないが、奥州仕置に関わり追放されたと伝えられる。

今泉遺跡の調査の結果、この城はおおよそ南北朝時代に城館として成立し、戦国末から江戸時代初頭にかけて再び使用されたことが判明している。

寺は消え観音堂が残った「高福院観音堂」

こうふくいんかんのんどう

地図⑤

『三十番札所・高福院観音堂』

こうふくいんかんのんどう

天台宗の寺院だった高福院は廃寺となり、今は寺跡も明らかではない。高福院観音堂は三十番目の札所で、本尊は聖観音である。一説には聖徳太子作と伝えられているが、真偽は定かではない。

この観音堂には地名の由来となった伝説が残されている。今泉の水田に観音像が飛来し、その場所に泉が湧き出たという。以来、付近の人々はこの土地を観音田かんのんだと呼ぶようになった。観音田の地名は最近まで使われていた。

現在この観音堂は、土地の所有者である遠藤崇さんの屋敷内に祀られており、遠藤家をはじめとして地域の人々に大切に管理・保護されている。



現在でも15～20人位の団体に巡礼する方々がいるが、観音堂や聖観音の傷みが深刻だと遠藤さんは語っている

広瀬川と名取川の合流点 日辺

につべむら
『日辺村』 現仙台市若林区日辺

飯田村の南西、名取川と広瀬川の合流点付近の左岸、自然堤防上に立地し、全体に平坦地。東は今泉村。仙台城下の南東にある正楽寺の慶長13年（1608年）の鐘追銘に名取郡日辺郷小原村とみえる。「正保郷帳」に田四十一貫四百七十文・畑十九貫二百五十二文、ほか新田五百八十三文とある。幕末と思われる村毎貫高付（斎藤報恩会蔵）では八十六貫二百四十八文。「封内風土記」に戸数四十六とある。「名取郡地誌」によると明治十（1877）年頃の戸数六十六、男二百五十四・女二百二十六、馬三十八で、物産に鮎二千尾・鱒百二十尾・鮭百八十尾・鶏卵二千六百顆・蕨二千枚などがあり、船十二艘があった。「封内風土記」に日高八幡宮と日宮八幡宮がみえ、仏宇として根本観音堂がある。本尊は慈覚大師が造ったと伝え、四郎丸村大善院の中木観音、根岸村常蔵院の末木観音と同一の木から造られたとされる。真宗大谷派の光明山徳照寺は中世の造築という日辺館（※5）の跡に建つとされる。慶長十二（1607）年仙台近辺では浄土真宗最初の寺として当地に正楽寺が建てられたのが城下の八ツ塚（新寺小路）に移った後、寛文四（1664）年徳照寺が開山された。本尊は阿弥陀如来。境内に天明・天保飢饉の供養塔、飢饉の時に御救小屋設置など救済にあたった針生林蔵の墓がある（墓碑銘）。
(平凡社「宮城県の地名」)

（※5）日辺館

中世の城館日辺館は、伊達政宗が東北最古の浄土真宗正楽寺を再建した跡地の徳照寺境内にあったとされる。東西80m、南北100mの規模で、城主や由来などは不明。

縄文時代以来の集落跡「高田B遺跡」

『高田B遺跡』

高田B遺跡は平成3年から6年にかけての仙台南部道路建設に伴う大規模な発掘調査で発見され、縄文時代から近世にかけての集落跡、水田跡、室町時代の水田跡、建物跡、河川跡が検出された。

河川跡からは弥生時代の土器や木製農具、古墳時代の建築材などが大量に出土している。その中でも儀杖形木製品は東北では初の出土である。権力者のシンボルであった儀杖型木製品は、二千年前の弥生時代の日辺に成熟した集落社会が形成されていたことを物語るものである。

高田B遺跡、今泉遺跡、神柵遺跡（沖野）等からの出土品は平成16年に地底の森ミュージアム（富沢遺跡保存館）で「土の中からのメッセージー広瀬川・名取川の下流域の遺跡」と題した企画で展示された。

畑の中から現れた如来像「定義如来」

地図⑥

『定義如来』

土地の所有者、針生家は代々屋号^{かど}を角と称し古い家柄である。針生家で昭和7年に畑を開墾した際、石塔と如来像が出土した。石塔には「文化四年…如来堂…三月…」の文字がかすかに読み取れ、石塔の下にあった如来像は朽ちていたが、頭部と思われる部分があった。

この如来像の由来などは不詳であるが、後世に伝えたいとの思いから、当主の針生初男さんは青葉区大倉の^{じょうぎによらい}定義如来さんから許しを得て、同名の^{じょうぎによらい}定義如来と呼んでいる。



石塔



前方に今泉清掃工場、背後に南部道路を背にして畑の中にポツンと建っている。

門松伝説のある八幡さま「日の宮八幡」

『日の宮八幡』

屋号^{とおひがし}遠東の針生作男さんの屋敷には、かつて日の宮八幡神社が祀られていた。日の宮八幡は原始信仰では太陽の神を祀ったもので、東北地方一帯に多く見られ、その歴史は古い。また、遠東は集落の東端を表すので朝日（太陽）と関係があるものと思われる。

安永元年（1772年）の封内風土記に「日ノ宮八幡・之が邑名の本」と記され、日の宮八幡の辺（あたり）にある集落であることから、日辺と呼ばれるようになったというのが定説である。また、アイヌ語で「ベツ」「ベツ」は“大川”を意味し、広瀬川と名取川の合流点の下流は江戸時代大川と呼んでいたことから、アイヌ語名であるともいわれる。

漢和辞典によると「日辺（邊）」の「日」は日本の略称、「邊」は国さかい、はてなどを意味している。郡山官衙^{かんが}（※6）の発掘によって、7世紀後半から8世紀初頭の時点では、広瀬川以南の地が名取郡で国の直轄地であったことが推測される。日辺あたりが国の最北端だったようだ。

(※6) 郡山官衙

郡山(仙台市太白区)では、7世紀半ばから8世紀初頭まで営まれていた東北地方最古の官衙(役所)跡とそれに伴う寺院跡(郡山廃寺)からなる遺跡群が発掘された。

郡山官衙は2時期に分けられ、I期官衙は東北地方の蝦夷を支配下におくための拠点として、II期官衙は多賀城へ移る前の陸奥国の国府として造営されたもので、平成18年7月に国史跡指定となった。

遺跡調査によって名取川・広瀬川の下流域が、古代国家成立期における拠点だったのではないかと推測され、六郷地域もその一部ではなかったかと考えられている。

にっぺ かどまつ
『日辺のお門松』

地図⑦

日の宮八幡には次のような言い伝えがある。

「日辺のお門松様」

昔お正月も近いある日のこと、日辺の弥右エ門さんが枝振りのいい松をとってきて立派な門松をたてた。お正月が終わった一月十五日の朝、門松を苗代の鳥おどしにするために地面にずっくりとさすと、松は枯れもせず、しっかりと根付いたと。

そして秋になるとうるさい雀どもを追っ払い、たくさんの稲を実らせた。

「これはなんと不思議な松だ」弥右エ門さんは自分の家の敷地内にある、日の宮八幡のそばに松を植えかえた。

それからは、弥右エ門さんの家では「おらいのうちでは門松があっから」といってお正月には門松をたてないことにしたんだと。そしてその松をお門松と呼びだいにしてきたと。いま弥右エ門さんの子孫の針生さんの家では、3メートルほどに伸びた松を4畳半ほどの広さの赤い玉垣でかこい、大事にまつている。

(途中省略)

針生さんの家では、代々お門松に毎朝ご飯をあげているが、お正月には、朝晩、お雑煮だのあんこ餅だの魚だの黒豆だのをあげ、夜にはお神酒もあげているんだと。そしてそのお神酒を松の根本にかけて必ず松ノ木に飲ませてくるんだと。

(仙台市制百周年を記念して出版された「せんだいむかしばなし」より抜粋)



現在は3代目の松がすくすくと伸びている。針生家では先代の松の木で彫った神々も大切に祀っている。

眼病を治す「三日月不動尊」

地図⑧

三日月不動尊



両全院より南の相原文雄さんの屋敷内に三日月不動尊が奉祀されている。ここは眼病を癒す仏様として、今も参拝者が訪れる。三日月の由来は不詳。

昭和15年頃、堂宇を建立して修験者を招いたが、いつの間にか遁走していたという。その時に残された太鼓が、この土地の以前の所有者である相原啓作さんの玄関に置かれ保管されている。

餓死者のための供養塔が建つ「徳照寺」

地図⑨

徳照寺

徳照寺は浄土真宗で光明山と号し、正楽寺の跡地に寛文4年（1664年）円寿によって開山された。この地には中世の城館・日辺館があり、昭和の初め頃まで寺域の周囲を土塁や堀が巡っていたと古者は記憶している。（P. 8 日辺館参照）

寺内には、天明・天保の飢饉の供養塔と、この飢饉の際、救済に奔走した針生林蔵の墓がある。



徳照寺

針生林蔵

針生林蔵の先祖は猪苗代芦名氏の一族で、伊達政宗が天正13年（1585年）に会津の芦名氏を攻めた合戦で、伊達氏に味方した功によって、日辺の地を受領したといわれる。



林蔵は徳照寺のほか広く、天明・天保の飢饉の際に私財を投じて施粥をして難民救済に当たり、その功により武士に取り立てられた。

また、林蔵は緑化運動の先覚者でもあり、城下に杉、桐、桑の苗木3万本余りを植え付けたという。杜の都仙台の緑化によせた功も大きかった。

ききんくようとう 『飢饉供養塔』

天明3年（1783年）は春から天候不順が続き全国的な大飢饉となった。仙台藩領内でも56万5千石余りの減収となり、翌年も疫病が流行して30万人もの死者がでたという。日辺でも天保3年に6人だった死者が、翌年には6倍の38人となったほどである。

この飢饉で亡くなった人々の供養塔が徳照寺の山門右側に二基ある。左側の石塔は、針生屋権十郎（仙台河原町の富商）が天明飢饉の死者のためにその五十回忌に建てたもので、右が天保飢饉の際の供養塔である。これには「申酉兩歳（天保七、八年死亡者為供養）」とあり、天保9年9世秀教和尚の代に、日辺の若者組で建てたものである。



観音像のゆくえ知れず「子育て観音堂」

地図⑩

『子育て観音堂』

徳照寺の西隣り、佐藤授さんの屋敷内に子育て観音堂がある。由来や年代は永らく不明であったが、平成2年のお堂解体時に天保8年（1837年）と記された銘が見つかった。それによると、観音像は仙台三十三観音の十番札所延寿院（現・善入院）のものだったのではないかと推測される。

この観音様には一つの言い伝えがある。ある星のきれいな夜、外に出ると前方から光る物が飛びこみ、恐る恐る拾い上げると、子供を抱いた絹張りの観音像だった。それ以来、佐藤家ではありがたい観音様だと早速お堂を建立し毎日朝食を供していたという。



中に観音像が収められている

大切にしていた観音様だったが、昭和44年に盗難に合い警察署に届け出たが、今だに見つかっていない。平成2年に再建し、徳照寺で落慶法要をした。

巡礼の盛んな頃は二十六番札所と同時にお参りし、また近郊から子の成長を願ってお参りする方も多かったが、今日では数少なく侘しさを感じていると佐藤さんは話している。子育て観音は仙台藩の赤子養育政策（※7）と関わりがあったと考えられる。

(※7) ^{あかごよういくせいさく}赤子養育政策

仙台藩の農村の人口は江戸時代も過ぎた18世紀後半から急激に減少し、天明6年(1786年)には藩政期を通じて最低を記録した。

人口急落の要因は2度にわたる飢饉にあった。また農村から都市部への人口流出も多かった。人口増加を目指す仙台藩は18世紀半ば以降、^{あかごよういくせいさく}赤子養育政策を藩全体の制度として確立した。これによって、赤子養育制度、赤子の供養などを、子育て観音、子育て地藏として石碑に残したのではないかと推測される。

1本の木から三観音がつくられた「^{りょうぜんいんかんのんどう}両全院観音堂」

地図①

『^{りょうぜんいんかんのんどう}二十六番札所・両全院観音堂』

^{もときざん}本木山観音寺があったが後に廃れて、^{りょうぜんいんかんのんどう}両全院観音堂だけが残った。今は八坂神社と並んで建っている。観音堂には、^{じかくたいし}慈覚大師の作と伝えられる聖観音が安置されていたが、明治15年(1882年)の火災ですべて羅災してしまい、いまの堂宇・本尊は明治末に再建されたものである。

両全院の聖観音、四郎丸落合にある三十一番札所・大善院の十一面観音、長町一丁目の三十二番札所・常蔵院の聖観音は、1本の木から三つの観音像を造ったと言い伝えられるが、この地に住んだ大番士^{もてぎ}茂木氏の先祖が安置したので^{もてぎかんのん}茂木観音を、役人が誤って根本(モトキ)といったという説や、木の根元で作ったので根本(本木)になったという説もあり真偽は不詳。

境内には嘉永4年(1851年)建立の大日報身真言塔ほか13基の石仏が建っている。



観音堂

左：八坂神社　中央：両全院観音堂　右：弁財天
現在は徳照寺の管理となり、町内会で世話にあたっている。

村を不作と疫病から守ってきた「神明社」

地図⑫

『神明社』

針生繁浩さんの屋敷内に神明社があるが由来などは不詳。

言い伝えによると、針生家の先祖に三十郎さんという人がいて、徳の篤い人だったという。常に困窮者や弱者をいたわりながら、農耕や不作の対策などにおいても村人を指導し、皆から信頼され慕われていた。それ故、三十郎さんはこの土地の地名・田中から「田中長者」と呼ばれた。このあたりで不作や病からの難を逃れることが多いのも、神明社のご加護と田中長者のおかげに違いないと地域の人々が感謝し、御礼に神明社に神楽を奉納することになった。その際、隣家で舞台を寄進したので、現在でも屋号を舞台と名乗っている。

奥州征伐までさかのぼる歴史「高田八幡神社」

地図⑬

『高田八幡神社』



宮城県沖地震（1978年）で破損した社殿はその後修復された。

大友新次郎氏の屋敷内に八幡様が祀られている。寛治年中（1087～1094年）源義家みなもとのよしえが奥州征伐の時この地を討平し、日辺に祠を設けて祀ったと伝えられるのがこの神社の云われである。

慶長5年（1600年）渡辺藤四郎なる人物によって飯田に遷座され現在の飯田八幡神社となったが、跡地には新たに御神体を勧請し、同屋敷内の奥に八幡神社社殿が静かに安置されている。

社殿右側には板碑いたびがある。板碑とは、板状に加工した石材に、梵字や供養年月日などを刻んだもので、中世仏教で多く使われた供養塔である。仙台市でおこなわれた学術調査によると、この板碑に刻まれている種子しゅじ（諸仏などを表す梵字）はキリーク（阿弥陀如来、千手観音を表す）で九月十三日という供養月日とともに刻まれている。



表面いっぱい記された種子の大きさから碑が巨大なものであることが予想され、大友家の協力のもと掘り起こして調査したところ、高さ約175cm、幅70cm、厚さ24cmの巨碑であったという。

「化石（ばけいし）伝説」

この板碑には不思議な言い伝えがある。この神社には以前は立派な参道があり、参拝者も絶えなかった。ところがある時から夜な夜な怪しげな光を放つ妖怪が現れて、参拝者や近隣の人々を悩まし始めた。ある夜、通りかかった武士がその難を除こうと、待ち構えていると、ついに妖怪が現れ手ごたえ十分と一刀両断にした。翌朝調べたら妖怪の姿は無く、傍にあった石が割れていた。以来、妖怪は現れず神社は平穏になり、参拝者も安心してお参りすることができたという。

それからというものの土地の人々はこの板碑を化石ばけいしと呼んでいる。



化石の先端は2つに割れていた

古老が伝える地域の物語

今泉の物語

以下は、今泉・祐善寺の前住職、立花正宣氏の残されたメモをもとに、六郷を巡る会の佐竹清造さんがつくった原稿から起こしたものである。

子供の夜泣きを治す『夜泣石』

祐善寺の東南一丁ほどのところに崩れかかった前方後円墳があって、これを夜泣石塚と呼んでいた。塚の上には六字の名号(南無阿弥陀仏)を刻んだ夜泣石が建っていた。

これに願をかけると、子どもの夜泣が止んだという。

塚、石ともに現存していない。なお、祐善寺近くの八坂神社の境内には、地元の人々が夜泣石と伝える石が残っているが定かではない。文字は風化しており判読できない。

廃寺の跡に残った『桜の木』

久保田圃(現・今泉2丁目)には、明治の終わり頃まで宝泉寺という寺院があった。廃寺になった跡には、昭和の初期まで根回り丈余(一丈は約3メートル)の桜の大木が数本茂っていた。この大木のあった家は、いまなお「桜の木」と呼ばれている。桜は現在はないが、佐竹さんはその姿を記憶している。

火葬場跡の『焼桜』

前田圃(現・今泉2丁目)には、水害や伝染病で亡くなった人たちの火葬場があり、根元が焼けたような桜が昭和10年代まで残っていた。この辺りの畑を地元の人はいまも「焼桜」と呼んでいる。現在、焼桜の跡には、「山の神」が祀られている。

名取郡道にあった『一里塚の碑』

焼桜から一丁ほど西の「旧名取郡道」のそばには、「広瀬橋よりここまで一里」という道標が立っていた。石は昭和30年代に始まった耕地整理のため、ゆくえ知れずとなっている。昔は六郷への幹線道路は3本あり、そのうちのひとつが「名取郡道」だった。ほかに、現在の仙台市営バス井土浜線となっている「井土浜街道」、宮城刑務所わきを通る「沖野街道」があった。

<名取郡道> 広瀬橋—飯田三橋—日辺五郎屋敷—今泉前田—中村—竹野花藤塚

<井土浜街道> 広瀬橋—現・県道井土・長町線

<沖野街道> 河原町—五ツ谷—宮城刑務所南側—沖野—霞目飛行場南側—荒井—二木

お経を埋めた『^{ほっけきょうづか}法華経塚』

前田圃（現・今泉2丁目）にあり、経塚とも呼ばれた。経塚とは古いお経を埋めた場所のことでこの法華経塚は現存しない。

いまは消えた地名『^{ざっこさく}雑魚作』

「ざっこさく」といって、現在の小字古川^{ふかわ}にあった地名。寛政12年（1800年）、この地に藩の命令で高札^{こうさつ}を立て、この地域の名取川流域で漁網や釣りなどの漁を禁じたという。高札の立てられた土地を雑魚作と呼んだという。

漁を禁じた『^{こうさつ}高札』

雑魚作^{ざっこさく}に立てられた高札^{こうさつ}は、仙台藩の御鶴場で飼っている鶴の飼料を確保するため、一般人による魚の捕獲を禁じたものと思われる。御鶴場^{ふかわ}は古川のほか、国分荒巻にもあったようだ。

「国分荒巻長沼併名取今泉古川に被相建候此所に於て
漁網等の漁候儀は不及申釣ともに停止者也
寛政12年閏4月」

というのが高札の文面という。

ちなみに、高札の立てられた小字名は200ヶ所くらいあったが、統合されて170ほどになっている。

川の流れの変化が生んだ『^{とびちふかわ}飛地古川』

小字古川^{ふかわ}は小在家^{こざいけ}近くの名取川沿いにあり、以前は川向こうの中田・四郎丸（郡）に属していた。過去には名取川がこの地を流れており、深い淵があったことから「深川」という地名になり、それが古川（ふかわ）に変じたようだ。幾たびもの洪水や氾濫によって川の流れが変わり、河川跡が平地となっている。飛び地となったため、地勢上は六郷地域に統合されているが、以前は納税や選挙などは川向かいの中田四郎丸管轄だった。昭和47年（1972年）六郷区域の今泉地区に編入された。

洪水を防いだ『^{せんぼんぐい}千本杭』

今泉地区の中村には、広瀬川と名取川が合流したあと鋭くカーブする場所があり、昔から大雨のたびに堤防が決壊する場所だった。昭和25年（1950年）、流れが突き当たる堤防に沿って「杭出し水制」と呼ばれる治水工事が始まった。無数の杭で増水した川の流れをやわらげ、堤防の侵食を防ぐ、当時としては最も有効な工法とされた。水害に脅かされていた地区住民も工事に多数参加したという。川の中に大きな櫓

を組み、約6メートルのマツの丸太を川底に1本ずつ打ち込む作業は、丸2年に及んだといわれる。これは大きな工作機械がなかった頃によく行われた「どんづき」とい



われる工法である。半世紀を務めあげた水の番人の役割を知る人は少なくなったが、杭の跡はいまも残っている。

現在は護岸工事がなされているが、以前は有名な釣り場で、夏から秋にかけてはハゼがたくさん釣れたという。

千本杭の夕日

記念碑が物語る『中村堤防決壊』

広瀬川と名取川の合流する日辺・今泉は、昔から大雨が降るたびに水害におびやかされてきた。明治以降で被害の大きかったのは次のとおりである。

明治22年（1889）9月11日、43年（1910）8月11日、
大正2年（1913）8月27日、同年9月28日、
昭和19年（1944）9月13日、22年（1947）9月15日、
23年（1948）9月16日、25年（1950）8月4日。

特に大正2年の水害の後、翌年には堤防が築かれ、それを記念して一本松に碑が建てられた。この記念碑は中村のバス停のところに現存している。また、昭和25年の水害では、中村の家屋が浸水し犠牲者も出た。



日辺の物語

以下は、古老から聞いた話をもとに、六郷を探る会の小田島政雄さんがまとめたものである。

六郷と四郎丸を結んだ『渡し舟』

名取川の落合側から日辺側に太い鉄線を張り、それを頼りに小舟で渡しをやっていた。船頭さんは、落合側に掘っ立て小屋を建てて住み、小屋の周りには流木をいっぱい積んで、冬の寒さに備えていた。「おーい！」と呼べば深夜にもかかわらず、すぐ応えてくれた。舟は笹舟で一度に14～15人が乗れたが五十集のお婆さんたちが乗ると荷物が邪魔で6～7人しか乗れなかったようである。渡し舟は昭和47年、仙台バイパスに千代大橋ができる頃まで続いた。

ゆりあげ いさば ちやみせ 閑上の『五十集のおばさん』と『茶店』

五十集とは背中にボテザル(棒手策)を担いで魚貝類を行商する人たちのことである。おばさんたちは30～40キロの重いボテザルを背負い、男勝りのたくましい姿で、渡し舟に乗って日辺を通り、仙台方面に行商に行った。きつい仕事であったろうが、中には楽しいので一生続けたい、と言っていたおばさんもいた。町中では、昭和30年代までその姿が見られた。

また、おばさんたちの休憩場としたのが茶店であった。両全院観音の西側堤防沿いに、おばさんたちが一休みしたり、身支度を整える一軒の茶店があった。茶店の主は中村さんといい、河原にある小石を暖めて、おばさんたちの腹巻に入れたり、手袋に入れたりして暖をとらせていた。小石は無料だったが、行商帰りには、そのお礼にと店にある駄菓子などを買ってくれたので、結構商いになっていたようだ。この小石は夏の間、河原から集めておくのだが、小石拾いを手伝った子どもたちは、駄賃に駄菓子をもらせることもあった。子供たちにとってはうれしいことだった。

だちんば 荷物の積み替え場『駄賃場』

渡し舟から降りると300メートル位の所に駄賃場があった。たび重なる水害で今は跡形もないが、閑上から川をさかのぼっての船での輸送はこのあたりまでで、荷物はここで降ろし、馬や大八車に積み替えて長町方面へ向かった。この場所が荷物積み替えの駄賃を得ていたので、駄賃場とよばれた。

ばたけ しゅうじかんばたけ 囚人たちが耕した『スーズカン畑』(集治監畑)

広瀬川の左岸で日辺堤防の西側は、明治の初めごろまで荒地だったが、行政の指導で宮城刑務所の囚人によって開墾された。囚人たちは明治10年の西南戦争に敗れた政治犯である。開墾された畑はスーズカン(集治監)畑と呼ばれた。スーズカン畑は、後に日辺住民に地権が譲られ共有地となったが、平成になり、旧居住者で割譲され今日に至っている。



スーズカン畑があったのはこのあたり

近寄りたがたい場所『タコドリ』

スーズカン畑の一角に通称タコドリという場所があった。なぜタコドリと呼ばれていたか、また、いつからそう呼ばれていたかはわからないが、その場所は現在の水道管橋北側で、昭和22年の水害で伐採されるまでは、うっそうとした雑木林に蔭がから

まり、いばらや笹藪が奥への侵入を拒み、狐、狸、妖怪の棲家のような場所だった。夕暮れにはこうもりが「チェチェ」と鳴き飛び交い、その光景が一層恐怖感をあおっていた。日中でも一人歩きは気味が悪く、五十集のおばさんたちも恐々と足早に通り過ぎていた。

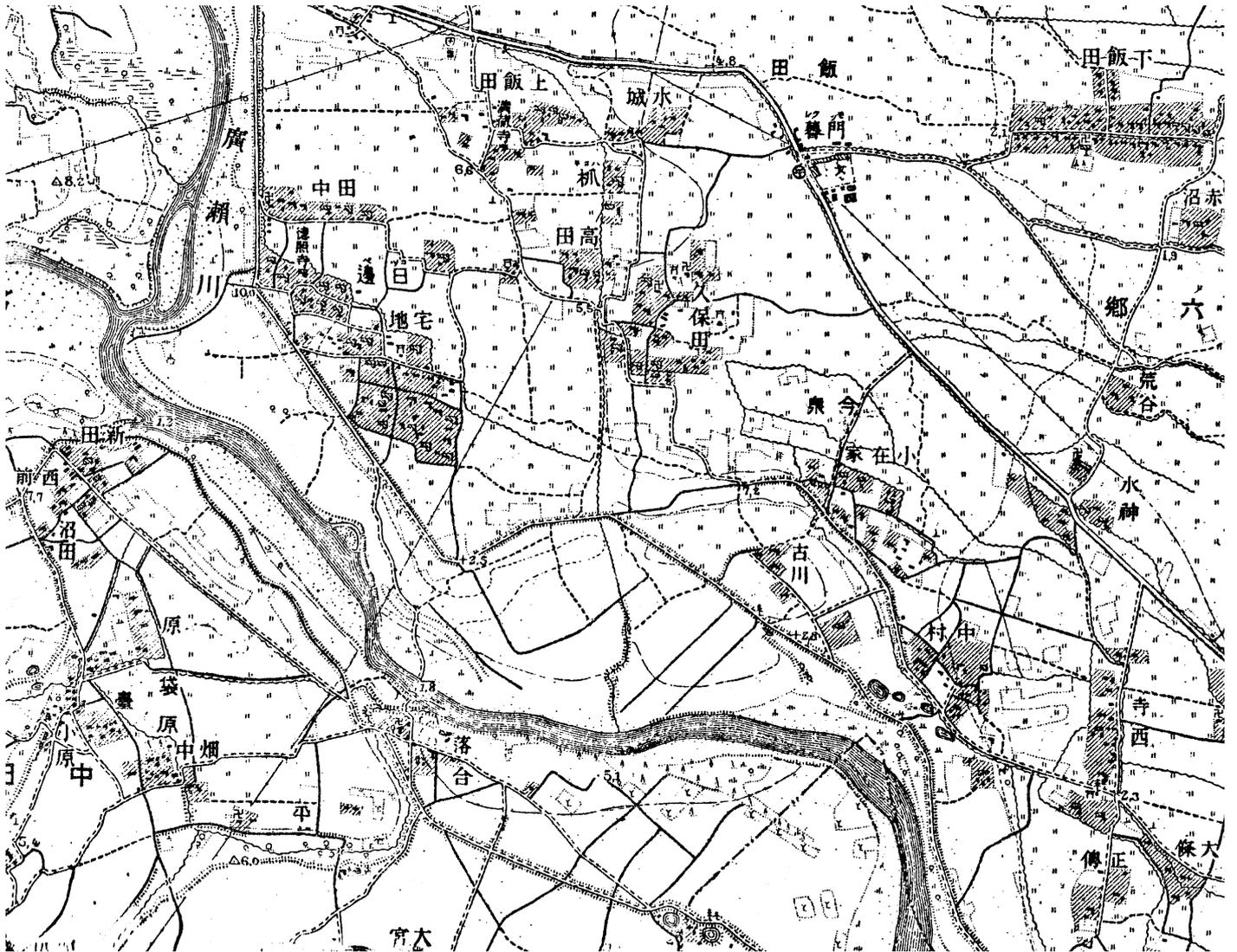
釣り人が集う『鮎小屋』^{あゆごや}

広瀬川と名取川の合流点の高原^{たかつぼら}に鮎小屋があった。鮎の解禁中は、相原武治爺さんが営んでいた。合流点は鮎釣りの絶好の穴場で、釣り人の多くがここに集中した。ガラ掛けという投げ釣りでは、隣同志の釣り糸が絡み合うこともたびたびであった。釣れた鮎は買い上げられるので、生活の糧としていた人もいたようである。洞長靴を履いて一日中、川を堰き止めるように水に浸かった冷たい体を鮎小屋で休めて、小屋で供される温かい味噌汁と地元で取れた野菜を使った煮物やてんぷらのおかずは、皆の楽しみであった。釣り客の中にはモッキリ（酒）を望む人もいたが、武治爺さんは、呑んだら釣り竿を取り上げ、絶対渡さぬ頑固爺さんだったという。

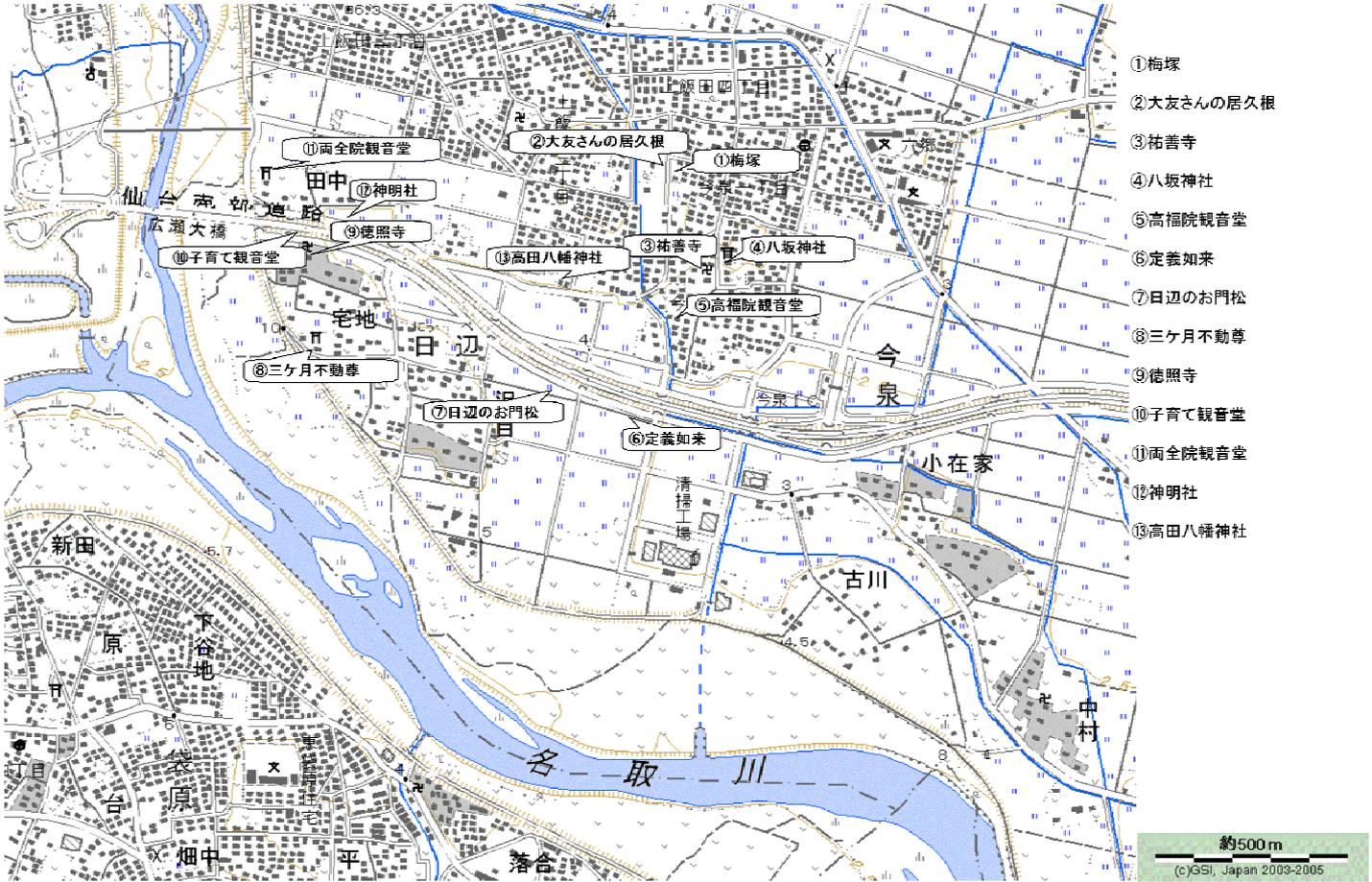
子供たちの古戦場『高原運動場』^{たかつぼらうんどうじょう}

飯田に今の六郷小学校があった頃、体育の授業や運動会の場として、河川敷を使用したのが高原運動場である。その後は子供たちが砂糖の空き箱で作った背囊^{はいのう}を使った兵隊ごっこや、折りたたみの小刀で作った自前の刀でのチャンバラ遊びなどで暗くなるまで遊んだ。運動場は、昭和15年頃に大豆や麦の畑となった。

昭和 22 年の六郷



現在の六郷



協力者一覧（五十音順・敬称略）

相原 啓作
相原 忠次
相原 とき
相原 文雄
相原 正勝
遠藤 崇
大友 新次郎
大友 一
佐藤 授
徳照寺
針生 けさよ
針生 繁浩
針生 作男
針生 初男
堀口 はつひ
祐善寺
六郷カメラ愛好会
渡辺 清

ご協力ありがとうございました。

参考文献・引用文献一覧（敬称略）

平成18年度『六郷を探る会』資料集
六郷地区 共通資料

1. 古文書にみる江戸時代の六郷
 - ・正保郷帳
 - ・除屋敷の帳
 - ・封内封土記
 - ・天保三年名取郡高人数帳
2. 宮城県の地名にみる六郷地域の六村・二浜の概要
 - ・陸前国名取郡地誌（＝皇国地誌）日辺・今泉編関連資料（庄司壽夫）
1. 六郷あたりでは最も古いとされる
日辺の高田B遺跡
2. 日辺の高田B遺跡の次に古い今泉遺跡と
その周辺遺跡
3. 日辺と郡山官衛（役所）の時代について
4. 日辺地名のいろいろと
郡山官衛（役所）のかかわり
5. 日辺の本木（根木）観音（第二十六番札所）と
慈覚大師円仁のかかわり
6. 400年前の奥州仕置と今泉城主・須田玄蕃
とのかかわりを検証

平成12年度「六郷を探る会」記録集（佐竹清造）

仙台市史（仙台市）

仙台の歴史（仙台市）

宮城県の地名（平凡社）

郷土六郷の沿革（飯沼勇義）

知られざる中世の仙台地方（飯沼勇義）

東北の再発見（渡辺信夫）

若林の散歩手帳（木村孝文）

仙台の社寺と教会（山本晃）

仙台藩ものがたり（河北新報社）

せんだいむかしばなし（仙台市）

宮城県の金石文（菊池武一）

仙台歴史研究（菊池武一）

六郷を探る会「今泉・日辺編」

<編 集>

「六郷を探る会」編集委員

庄司 壽夫（会長）

（以下五十音順）

小田島 政雄（若林区日辺）

鎌田 勝美（若林区上飯田）

佐竹 清造（若林区今泉）

佐藤 勝五郎（若林区三本塚）

齋藤 正和（若林区日辺）

鈴木 重正（青葉区旭ヶ丘）

西大立目 祥子（太白区長町）

渡辺 理一郎（若林区藤塚）

若生 昭弘（六郷市民センター館長）

高野 綾子（六郷市民センター）

発行 仙台市六郷市民センター

〒984-0835 仙台市若林区今泉 1-3-19

TEL 022 (289) 5127

FAX 022 (289) 6359

2006年（平成18年）10月1日